

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K11493

研究課題名（和文）発達障害児の社会性を育む短期通年型自然体験プログラムの構築：関係発達の視点から

研究課題名（英文）Short-term and year-round nature experience program to cultivate social skills of children with developmental disabilities

研究代表者

大友 あかね（Otomo, Akane）

筑波大学・体育系・特任助教

研究者番号：10859523

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000 円

研究成果の概要（和文）：自然体験活動に参加した発達障害のある児童の参与観察から、社会性を育む短期通年型自然体験プログラムの構想を行った。参与観察より、発達障害のある児童は、仲間と関わりたい気持ちを持ちながらも自己表現の不得手さや警戒心から孤立してしまう場合がある一方、次第に指導者を仲介役としながら他の参加者と相互理解を深めていく様子が捉えられた。短期通年型自然体験プログラムの構築においては、一日の中での関係の発達と年間を通じた長期的な関係の発達が図れるようプログラムを設計する必要がある。その際、登山やサイクリング等の各活動の特徴を踏まえたプログラム設計や、意図的なグループサイズの設計が重要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害児の社会性をいかに育むかは、わが国の教育課題である。本研究により、自然体験活動における関係発達の支援の中で発達障害児の間主観性ならびに繋合希求欲求が育まれることや、グループサイズを意図的に小さくし、参加者の主体性が高い活動をプログラムに組み込むことが重要であることが明らかとなった。このことは、多くの発達障害のある子どもたちが参加しやすい短期間の自然体験活動に転用できる知見であり、自然体験活動を活用した関係発達の支援策につながる意義ある成果である。

研究成果の概要（英文）：Based on observation of children with developmental disabilities who participated in nature experience activities, we designed a short-term, year-round nature experience program that cultivates social skills. From the observation, we observed that children with developmental disabilities sometimes isolate themselves due to their inability to express themselves and their wariness, while gradually deepening mutual understanding with other participants, with the instructor acting as an intermediary. In designing a short-term, year-round nature experience program, it is necessary to design a program that allows for the development of both one-day relationships and long-term relationships over the course of the year. In doing so, it became clear that program design based on the characteristics of each activity, such as mountain climbing and cycling, and intentional group size design are important.

研究分野：身体教育

キーワード：関係の発達 仲介役から見守り役へ 参加者の主体性の度合い グループサイズ

1. 研究開始当初の背景

発達障害児童生徒の増加が報告されて久しく、中核的な症状である社会性への有効な支援策の確立はわが国が抱える教育的課題である。近年、発達障害児の社会性に起因する生きづらさを関係発達という視点から捉える考え方が広がっている。これは、周囲との関係の在り様が発達障害児の心に負の影響を及ぼし、そしてそのことがさらに負の行動につながる可能性があるとして捉える〔鯨岡、2012〕。つまり、生得的な社会性の低さだけではなく、その結果生じる他者との関係性の中にこそ生きづらさの原因があるとする考え方である。従って、発達障害児の社会性を真の意味で支援しようとするならば、他者との肯定的かつ双方向的な関係発達を通じて、他者の主観的状态を共有する力(間主観性)とともに、他者に関わろうとする態度(整合希求欲求)を育む必要がある。

さらに、社会構造の変化に伴い、従来、子どもたちが社会性を身につける場として機能してきた遊びの場が喪失しつつある。

こうした現代の子どもたちの社会性を育む場として、キャンプなどの自然体験活動がある。自然体験活動は遊びの要素を含む種々の活動をプログラムとして意図的に配置し、直接体験を通じて参加者の成長を支援する教育活動である。協力して何かを成し遂げたり、自分達に関わる事柄を話し合って結論を出したり、あるいは我慢や譲歩が求められる活動をプログラムとして意図的に活動に組みこむことが可能である。また、関係発達の視点から見れば、指導者(キャンプカウンセラー、ファシリテーターと呼ばれる)はグループの子どもたちの関係発達を重視し、その関係性を基盤に活動が展開される点が特徴である。申請者はこれまで、2週間程度の長期冒険キャンプが発達障害児の社会性の育成に効果があること、仲間や指導者との深い関係性が社会性の獲得に影響を与えていたこと等を明らかにしてきた〔大友・坂本、2017〕。一方で、一般的に実施されている半日～3日間程度の自然体験活動における社会性育成の効果やプログラムの検討は十分になされておらず、発達障害児が比較的参加しやすい短期間のプログラムの効果検証が求められている。以上のことから、本申請の研究課題は、発達障害児の社会性の基盤となる間主観性および整合希求欲求に肯定的な影響を与える自然体験活動プログラムを構築することである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、発達障害児を対象に自然体験活動を実施し、1)プログラムの中で発達障害児が示す社会性の困難さを関係発達の観点から検討すること、2)間主観性および整合希求欲求の変化を短期通年型プログラム前後で検証すること、3)間主観性および整合希求欲求に肯定的な影響を与える短期通年型自然体験プログラムを構築すること、である。

3. 研究の方法

当初の予定では、発達障害児を対象に、年間を通じて定期的かつ短期間の自然体験活動を実施し、間主観性および整合希求欲求に及ぼす影響を検討し、効果的なプログラムを構築する予定であった。しかしながら、研究初年度である2021年度は新型コロナウイルスの影響で定期的なプログラムを立案することが難しい状況であり、2022年度も新型コロナウイルスの影響が残り、またそのような状況に伴い被検者の確保に目途が立たない状況であった。そのため、当初の短期通年型のプログラムではなく、比較的实施が容易な宿泊型のプログラムを対象に調査を行い、そこで得られた知見を短期通年型の自然体験プログラムに転用し、プログラムを構築することとした。具体的には、関係発達の課題の検討(課題1)、参加者評価(課題2)、プログラム開発(課題3)を行った。研究期間は3年である。

(1) 研究課題1 自然体験活動場面における発達障害児の関係発達の課題の検討

方法：宿泊型自然体験活動に参加した発達障害児を対象に、他者(参加児童・指導者)と関わる様子を参与観察により記録し、活動の中で生じる課題を関係発達の視点から検討した。

対象：発達障害またはその傾向を有する小学生3名

対象とした宿泊型自然体験活動：2021年から2023年に実施された、6泊7日または8泊9日のキャンプ。プログラムの内容は、自然の中での身体的活動(登山、サイクリング、徒歩移動)、野外炊事、テント泊など。なお、対象としたキャンプは、様々な個性や特性をもつ子供たちが性別や障害の有無等に関係なく、自然やチャレンジへの挑戦や他者との協働を通して、お互いを認め合い、成長し合っていくことをねらいとしたキャンプであり、毎年3～4名程度発達障害の傾向がある児童生徒が参加していた。

(2) 研究課題2 プログラム参加児童の整合希求欲求の評価

方法：2021年から2023年に実施された宿泊型自然体験活動に参加した児童生徒を対象に質問紙調査を実施した。

対象児：研究課題1と同様のプログラムに参加した小学5年生～中学3年生38名

発達障害の傾向のある児童 11 名

定型発達児 27 名

実施した質問紙：他者と関わろうとする態度である繋合希求性を測る指標として以下の 2 つの尺度を採用した。

- ・他者あるいは社会の規範に則った生き方への志向性を測る「社会志向性」尺度（伊藤 1993 を一部修正）

項目：人に対しては誠実であるように心掛けている

周りとの調和を重んじている

社会のルールに従って生きていると思う

社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい

人とのつながりを大切にしている

- ・自分は人から受け入れられている、人とつながれているということに根ざした肯定的な感情を測る「被受容感」尺度（鈴木，2005 を一部修正）

項目：私はまわりから受け入れられていると思う

私はまわりから大切にされていると思う

私は人とつながっていると思えている

みんなあたにかい心で私をむかえいれてくれているように思う

私はまわりから理解されていると思う

私は優しい人にかこまれて 1 人ではないと思う

私の考えや感じを何人かの人は分かってくれると思う

手続き：キャンプ 1 か月前、キャンプ最終日、キャンプ終了 1 か月後の 3 回、調査を実施した。

統計処理：js-STAR XR+ release 2.0.0 を用い行った。社会志向性と被受容感の得点の変化を検討するために、独立変数を群（発達障害群と定型発達群）と調査時期、従属変数をそれぞれの尺度得点とする混合計画の 2 要因分散分析をおこなった。

（3）研究課題 3 間主観性および繋合希求欲求の向上に効果的な短期通年型自然体験プログラムの構築

方法：課題 1、2 で得られた結果を検討し有効なプログラムを構想した。

4. 研究成果

（1）研究課題 1 自然体験活動場面における発達障害児の関係発達の課題の検討

A（小 6、男）の参与観察からは、仲間と関わりたい気持ち、役に立ちたいという気持ちがある一方で、本人の意図が伝わりにくい不器用な関わり方をしていること、他の参加者や指導者の否定的な反応がさらなる関係の悪循環へとつながっている可能性が示された。

B（小 6、男）の参与観察からは、他者と関わろうとする関係欲求や物事への好奇心を持っている B の主体性を認め、活かそうとするキャンプカウンセラーの関わりが B のさらなる関係欲求を引き出していた可能性が示され、キャンプは周囲の仲間や指導者と快の情動を分かちあい、関係欲求をさらに高める場になっていたと考えられた。

C（小 6、女）の参与観察からは、仲間と関わりたい気持ち（繋合希求性）を持ちながら用心深く友人と関わる姿から、自分の気持ちを伝え、仲間と共に活動するために他者の手助けを受入れる姿への変容が捉えられた。C と仲間双方に関係発達の行動が見受けられた一方、自由時間になると気の合う友人と自由に遊ぶ参加児童の姿が見受けられ、C は一人で絵を描いたりスタッフと一緒に食事をとったりなど、C が孤立してしまう場面も見受けられた。

以上の 3 名の参与観察より、自然体験活動場面で生じうる関係発達の課題および、具体的な支援策が明らかとなった。

【関係発達の課題】

- ・仲間と関わりたい気持ちがある一方で、関わることへの不安や自己表現の不器用さがあり、周囲の仲間から否定的評価を受けやすい。（対象児が仲間と関わりたいという欲求を持っていることを周囲が理解しにくい。）

- ・周囲の仲間や指導者の否定的反応がさらなる関係の悪循環へとつながりやすい。

【関係発達を促す具体的な支援方法】

- ・指導者が、否定的に見える行動の背景にある仲間と関わりたいという気持ち（関係欲求）を読み取る必要

- ・指導者が安心感を与え、仲間との仲介役になる

- ・さらなる関係欲求が生じるよう、快の情動（達成感や自信）を共有

- ・関係づくりに苦手さのある児童にとって、グループが枠となり周囲との関係発達が促進される

- ・グループの仲間としての親近感や連帯感を関係発達へとつなげる

(2) 研究課題2 プログラム参加児童の整合希求欲求の評価

社会志向性と被受容感の変化を検討するため、群を発達障害群と定型発達群の2群とし、調査時期をキャンプ前 (Pre)、キャンプ最終日 (Post1)、キャンプ終了1か月後 (Post2) の3時期として、二要因分散分析を行った。分散分析の結果、いずれの尺度においても交互作用は有意ではないことが明らかとなった。また、被受容感の時期の主効果について有意差が認められ ($F = (2, 72) 12.66, p < .05$)、多重比較の結果、キャンプ前よりもキャンプ最終日、キャンプ終了1か月後が得点が高いことが明らかとなった ($MSe = 0.1501, * p < .05$)。

以上の結果より、発達障害の有無にかかわらず社会志向性はキャンプ前後で変化しないことが明らかとなった。キャンプによって有意な変化は見られなかったものの、発達障害の傾向がある児童生徒も、定型発達の児童生徒と同様に、他者との調和を尊重し、人とのつながりを大切にしながらキャンプに参加していたことが示された。このことは、本研究がテーマとする整合希求性を保ちながら、発達障害の傾向のある児童生徒がキャンプ活動を遂行していたことの証左といえるだろう。

また、被受容感については、群によらず、キャンプ前よりもキャンプ後に向上することが明らかとなった。このことは、発達障害の傾向のある児童生徒も定型発達群と同様に、被受容感が向上したものと考えられ、社会性が未熟な故に否定的な評価を受けやすい発達障害の傾向のある児童も、キャンプの場で他者から受け入れられる経験をしていたものと考えられる。そのような事象が生じた要因としては、グループ活動であるがゆえに、活動を遂行するためには発達障害の傾向のある児童も、定型発達の児童生徒もお互いに他者を受け入れる必要性が生じたことや、様々な活動を共に乗り越えることでグループとしての連帯感や一体感を味わったことが挙げられる。このような関係発達の変容が根底にあり、他者と多くの時間を共有し意味のある体験を共に重ねたことが、被受容感の高まりにつながったと考えられる。

本研究課題においては、被受容感においてのみ、キャンプ前後での変化が認められたが、発達障害の傾向のある児童生徒も、定型発達の児童生徒と同程度の社会志向性を有していることが明らかとなった。キャンプ活動の中で、他者から受け入れられる感覚を味わう肯定的な経験は、その後の他者との良好な関係づくりの基盤になるとも考えられ、限られたキャンプの時間であっても、発達障害の傾向を有する児童生徒が温かく、良好な人間関係を体験することの意義は大きいと考えられる。

表1 分散分析結果

		平均 (標準偏差)						主効果		
		Pre		Post1		Post2		群	時期	交互作用
		M	SD	M	SD	M	SD			
社会志向性	発達障害群 (n=11)	3.81	0.33	3.93	0.40	3.75	0.52	1.25 ns	1.13 ns	0.73 ns
	定型発達群 (n=27)	3.88	0.58	4.11	0.67	4.10	0.74			
被受容感	発達障害群 (n=11)	3.90	0.68	4.34	0.60	4.35	0.63	0.36 ns	12.66 **	0.43 ns
	定型発達群 (n=27)	4.05	0.66	4.53	0.61	4.37	0.63		Pre < Post1 Pre < Post2	

**p<.01

(3) 研究課題3 間主観性および整合希求欲求の向上に効果的な短期通年型自然体験プログラムの構築

研究課題1、2の結果より、間主観性および整合希求欲求の向上に効果的な短期通年型自然体験プログラムの設計を行った。研究課題1および2の知見より、プログラム構築においては、特に一日のプログラムの中での関係の発達 (午前よりも午後) と年間を通じた長期的な関係の発達 (4月よりも12月) が図れるよう、プログラムの心理的・身体的強度を踏まえた設計や、指導者の関わり方を意図的に変容させる必要があると考えられる。具体的な要点としては、以下の4点である。

- ・年間を通じて、同じ指導者、同じグループの仲間との活動を保障
- ・個人活動や自由時間よりもグループ活動を中心としたプログラム
- ・登山やサイクリングなどの各活動における参加者の主体性の度合い (参加者主体か指導者主導か) を踏まえたプログラムの選択
- ・指導者が対象児の整合希求欲求を理解し、仲間との仲介役 (序盤) から見守り役へ (終盤)

以上を踏まえて、小学校中学年～中学生程度の参加者を想定し、短期通年型自然体験活動プログラム案を構想した。なお、プログラムは毎月一度、参加者は年間を通じて固定とした。

表2 短期通年型プログラムの構想

実施 時期	グループ	指導者の関わり	プログラム例		
			身体的活動	ものづくり	食事
4月	毎回同じグループで活動	<div>一日の中で</div> <div>多 → 少</div> <div>一年の中で</div> <div>↓</div> <div>少</div>	指導者がそばにいて心理的にも身体的にも負荷が低い活動 ・アイスブレイクゲーム ・ハイキング ・虫や植物の観察	同じ場所で一人一つの作品作り ・クラフトなど	・弁当持参 ・簡易野外調理（カートンドックなど）
5月					
6月					
7月					
8月			やや心理的・身体的に負荷が高い活動 ・サイクリング ・カヌー ・SUP	グループで一つのものをつくる ・秘密基地 ・遊具など	・火おこしが必要な野外炊事（カレーなど）
9月					
10月					
11月					
12月			参加児童に主体を任せやすく、グループでの意思決定が不可欠な活動（心理的・身体的に負荷が高い活動） ・オリエンテーリング ・トレッキング／登山 ・沢歩き	グループでつくったもので遊ぶ ・いかだで池探検など	・メニュー決め、買い出しを含む野外炊事
1月					
2月					
3月					

本研究で得られた知見は、今後の発達障害の傾向のある児童を対象とした自然体験活動のプログラムを検討する際に活用されることが望まれる。特に、社会性の未熟さが否定的な評価につながりやすい、発達障害の傾向のある児童生徒にとって、他者との関わりの懸け橋となる指導者がすぐそばにいることや、グループという居場所が保証されていることは、大きな意味がある。このような、子ども同士の遊びにはない自然体験活動の特色は、安心感の中で他者と関わることや、良好な人間関係を経験することを可能にし、彼らが抱えている繋合希求欲求を満たし、さらなる繋合希求欲求を生じさせる可能性がある。短期通年型自然体験活動は限られた時間の活動ではあるが、だからこそ限られたグループの中で温かくも濃厚な人間関係を経験することができ、発達障害の傾向のある児童生徒の社会性の育ちに貢献するものと思われる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1 . 発表者名 冒険キャンプが参加児童生徒の個人志向性・社会志向性に与える影響 - マウンテンバイクと歩きのプログラム特性に着目して -
2 . 発表標題 大友あかね、坂本昭裕
3 . 学会等名 日本野外教育学会第26回大会
4 . 発表年 2023年

1 . 発表者名 大友あかね、坂本昭裕、森山玖実、金谷洸晟
2 . 発表標題 統合型キャンプに参加した自閉症児の事例検討 - 関係発達の見点から -
3 . 学会等名 日本野外教育学会第25回大会
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 大友あかね、坂本昭裕
2 . 発表標題 冒険キャンプに参加した軽度発達障害児の事例検討：関係性発達の見点から
3 . 学会等名 日本野外教育学会第24回大会
4 . 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------